

## 氷紋

滑らかな雪面にさざ波のような風紋が波打ち、スカブラと呼ばれるうろこ状の文様が堅く締まった表面を鋭くえぐる。時には真綿のような雪帽子をかぶり、春が近い雪面にはえくぼの模様ができる。樹氷や霧氷そして「ユーモラスな雪の紐など、北国の冬の表情は自然が厳しいがゆえに美しいがゆえに美しい造形が現れ、眼を楽しませてくれる。

その一つに氷紋がある。池や湖が結氷した時、氷の表面に雪と氷と水で織りなす墨絵のようなモザイク模様が現れる。これが氷紋と呼ばれるものである。言葉の響きのよさで渡辺淳一の小説「氷紋」の題名でも使われている。

静かな水面に広がる波紋のような同心円状の輪の中心から放射状に伸びた直線が重なり、まるでクモの巣が湖面にはりついているような幾何学模様の氷紋が広がる。氷紋の本場、北海道の釧路の春採湖には中心からヒトデ形にジグザグ形にジグザグと伸びた腕をもつ氷紋や、枯れ枝状など実に多様な造形

が湖面の表面を飾っている。

氷紋の中心には必ず小さなまるい孔があっており、そこから水がしみ出て、シミのよう放射状に広がり墨絵の絵柄となる。雪と氷の三重奏で織りなす自然の造形である。雪が天からの手紙なら氷紋は氷に押し込められ覆われた湖からのメッセージである。

三者の微妙な条件さえ合えば氷紋はどこにできても不思議ではない。雪の研究家で知られる高橋喜平氏によれば、盛岡周辺でも氷紋が町の中でよく見られ春採湖より多様だったという。

薄氷の上に雪が薄らと積もった時が好条件で、でき方が微妙にちがっている。

今年の寒等地方はしばしば雪が降り、気温も〇℃を少し下がってケ野が薄く張りだした所に雪が積もりだすことがあった。盛岡が多の氷紋のでき方に気象条件が似ておりチャンスがありそうである。

筆者の住んでいる宿舎のとなりに尾毛があるが、いまだ氷紋の姿はみられない。